＜翻訳＞

A・グラムシ

「アメリカニズムとフォード主義」（上）

鈴木富久（訳）

訳者まえがき

本訳は、ジェラッターナ編『グラムシ・獄中ノート』全4巻（Antonio Gramsci, Quaderni del carcere edizione critica dell'Istituto Gramsci, a cura di Valentino Gerratana, Einaudi, Torino, 1975.）の第Ⅲ巻, 2137-2181頁, 所収, 「ノート」22番 (Q22)「アメリカニズムとフォード主義」 (Quaderno: 22, Americanismo e fordismo. 1934.) の全訳に, この版の編者による「解題」（同上, 第Ⅳ巻, 2422頁）および「註記」（同上, 同巻, 3001-3006頁）の邦訳を加えたものである。これを, 紙数の関係から上（§§1-9）・下（§§10-16）, 2回に分けて掲載する。

周知のように, この「アメリカニズムとフォード主義」（以下, ときにQ22と略記）については, すでに邦訳があり, 山崎功監修, 代久二編集『グラムシ選集』第Ⅲ巻, 合同出版, 1962年, 15-65頁, に所収されている（以下この選集を, 合同版と略記）。この意味では, 本訳は, 新訳の試みであるが, それには理由がないわけではない。というのは, この先行訳には, 明らかな誤訳が少なくず散見されることのほか, 当時としては当然のこととしてイタリア語問題別選集を底本としているため, 収録されている各覚書の配列順序という点で原ノートとは編成が異なり, また, 若干の覚書が欠けているとい
う、1975年の上記校訂版の出版によって初めて明らかになった大きな歴史的限界をもっているからである。

とはいえ、この種の限界は、Q22に関してだけでなく、じつは合同版邦訳『選集』の全体に妥当することであり、その意味では、この『選集』の歴史的役割はすでに終わっているといわなければならない。ところが、校訂版の翻訳書の刊行（獄中ノート翻訳委員会訳『グラムシ獄中ノート』、大月書店、1981年-。以下、大月版と略記）が中断したままであり、しかも、その再開の見通しはないと聞いてある。このため、全29冊（ほかに翻訳4冊）の原ノート（1929-35年執筆）のうちわずか最初の2冊（Q1, 2）が訳されてい

るだけであり、一般の読者は依然として、合同版の邦訳に頼らざるをえない状況にある。

他方、グラムシへの関心は、近年あらためて国内外でその広がりと高まりを見せている。すでに、上記校訂版の英語全訳本、独語全訳全訳のそれぞれ第1分冊が本年（1992年）出版されており、露語版の出版予定も伝えられている。1950年代に楔るわが国のグラムシ研究は、グラムシ著作の既述二つの邦訳書の出版活動をみても、その着手はグラムシの故国イタリアを別にして、もっとも早い国の一つであったと思われるが、いまや、その「後進国」になりつつあるかのようである。だが、その日本でも、新たな角度からの関心が多様に拡がっている。その新しい関心が向けられるもっとも目立った対象の一つが、この「アメリカナズムとフォード主義」に示されたグラムシの世界史的同時代分析である。

本訳は、こうして生じている、グラムシをめぐる新たな関心の増大と正確な邦訳テキストの不在という状況のなかで、一般的には、まさにこの懸隔を発徹しながら少しでも縮めようとする意図に発している。だが、訳出の対象としてQ22をすえたのは、もう一つの理由、訳者自身の研究課題との関連がある。

訳者の専攻分野は、社会学理論と産業・労働社会学であるが、これまでも
この関心角度からグラムシ研究に多少なりともかかわってきた。このなかで、Q22は重要な位置をしめており、端的に、アメリカンズム（新工業主義文明）、ソ連邦（第3インター）、ファシズム（動的革命）、等々、今世紀そのものの歴史的諸主題を複合的かつ先駆的に捕捉し、その認識内容をさることながら、次第に、そこにみられる同時代分析の視座と方法に関心を引きつけられてきた。というのも、そこには、いわば、“世界史的な視野からする国際関係論的比較社会分析”のきわめてユニークなマルクス主義的方法論が浮き、また、それがマルクス主義的であるかぎり、同時に、マルクスのいわゆる「土台一上部構造」論の、これまた類例を見ないきわめてユニークな再解釈（グラムシの用語法ではもっぱら「構造一上部構造」）にもとづく一貫した適用が着取されるからでたい。社会科学的研究における「社会」と「人間」、「労働」と「性」、「経済」と「文化」等々の、とりわけ社会学において絶えず問題となる統合的把握のための興味深い一範型が認められるし、そうだとすれば、このような主張性をも備えた彼の実際的経験的社會事象分析の独自的方法論は、一体いかなる内的論理構造において成立しているのか。また、その背後には、いかなる基礎理論（結局は哲学）が在るのか。が興味を引くはずにはおかないからであっただろう。

グラムシは、一般的に、つまり世界観のレベルで、彼の世界観の存立したいをふくめて、われわれは今なお「矛盾と必然性（結局は「闘争の必然性」）の地盤」にあると考えており、この「地盤」を遮断すべく「必然性」を「自由」に変える人間の「意思」を一切の経験的考察の認識論的基盤にすえた。このことが、Q22では、たとえば、序文的な節・§1にかわり明瞭かつ集約的に示唆されており、また実質的な最終節・§15の第3パラグラフ末尾にも端的に表れている。だが、このような、グラムシにおける経験的考察ないし分析の中核・領域と哲学的なそれとの関連の不可分性は、Q22の全体、否、そもそも「獄中ノート」の内容全体を構成する一つの著者の特徴であり、問題は、この関連を体系的に探り明るみに出すことである。
およそ以上のような問題関心から、すなわち、その認識論的方法論的な角度からQ22を解読すること、これは、おそらく国際的なグラムシ研究においてもまだあまり探究されていない問題に属しているよう。今回、Q22の訳出を企図した「もう一つの理由」とは、結局、訳者自身がこの題題に取り組んでいくためであるということにある。訳者のイタリア語の語学力と当地の文化・歴史事情にかんする知識はいまだ乏しい。あってはならないが、もし誤訳等があれば、遠慮のないご批判、ご教示をお願いする所存である。

記号・略号

Q：ノート番号。既述のように「獄中ノート」は、翻訳ノートを別にして、29冊であるが、各冊には、本訳が底本としている校訂版の編者により番号がつけられている。なお、底本には、グラムシの義姉タチアーナによってつけられたノート番号も併記されているが、訳出にあたり、これは省略した。

§：覚書番号。各ノートは、长短多様であるとはいえ総じて短い覚書の集積という叙述形式で執筆されている。その各覚書にグラムシは、一部のノートを除き、番号をつけていないが、編著によって、各ノートの各覚書のすべてに番号がつけられた。なお、底本には、問題別選集の対応箇所も指示されているが、訳出にあたり、これは省略した。

A稿、B稿、C稿：覚書には、編著者によってなされた次の３つの種別がある。すなわち、グラムシがいったん書きつけて、のちに抹消した「第1次執筆」のものをA稿、これを書き改めた「第2次執筆」をC稿、そのような変更を受けなかったものをB稿と呼んでいる。

[ ]：原語。

（ ）：底本で同じく丸括弧の箇所。各文の執筆者自身によってつけられた補足、簡単な註記など。

＜ ＞：編著者によってつけられた補足、簡単な註記など。
[ ]：訳者によってつけられた補足、簡単な著記など。

傍点：底本でイタリック体の箇所。但し、出版物名、論文名等は除く。

*：編者注記番号。

【編者】

ノート解題

学校用野線ノート（15×21 cm）、各ページ22行。表紙は、薄手のしなやかなパピレットク紙、色はすみれ色、大理石模様がついている。表紙の表には、ジョゼッペ・ラテルツァ父子、バーリという標記がある付箋がついている。その付箋の白い余白に、「アメリカニズムとフォード主義」というノートの題名が書かれてある（黒鉛筆、グラムンの筆跡）。もう一つの付箋があるが、これはグラムン死後タチアーナが貼りつけたもので、次の表示がつけられている。「未完成V, 1-2頁および11-55頁」。

ノートは48頁からなり、表紙と裏頁に1から96の頁番号が順番に打てある。刑務所のスタンプは押してない。ノートは、一部だけが使用されている。1-2頁は、2頁の最後の11行分を除いて執筆されている。3-10頁は、全部空白である。11-53頁は、全部執筆されている。54頁は、5行目の前まで使用されているだけである。55-96頁は、全部空白である。文字は、各頁の右のふちまでいっぱいに整然と書かれている。

このノートは、16点の覚書を収録している。15点がC稿、1点がB稿（§1）である。再版されるA稿を納めたノートは、ノート番号1, 4, 9, 3である。最初の覚書（§1）は序文であるが、節の記号（§）がついていない。だが、この版ではその稿に、編集上、記号（§）をつけた。

日付に関する直接の記載はない。編集者の註記は、A稿のものに加えて、グラムンが利用したと思われる若干の出典に言及している。『新作品集』の1934年の2月16日号と3月16日号の2つの各記事が特に重要である。
アメリカニズムとフォード主義【1934年】

＜§1＞、「アメリカニズムとフォード主義」という一般的で少々月長みな標題のもとに一連の諸問題を検討するつもりであるが、それまえに、現代社会の矛盾にみちた諸条件のなかでこれらの問題の解決が提起され試行されるときは必然的であること、このことが紛糾ばかげた立場、しばしば破局的傾向をおびる経済的・道徳的危機を規定すること、などの基本的事実を考慮に入れておかねばならない。一般的にいうことは、アメリカニズムやフォード主義は、計画経済の組織化に到達する内在的必然性の結果として生ずるものであり、検討される多様な問題は、古い経済的個人主義から計画経済へのまさしくその移行を示す鎖の諸環であらねばならないということ、つまり、そうした諸問題は、その発展過程が、その展開によって遭遇する多種形態の抵抗、「事物社会」にも「人間社会」にも固有の厄介さに由来する諸抵抗から生されるものである、ということである。進歩の企てでは、どんな社会勢力によって開始されても、基本的結果をともなわずにはおられない。すなわち、新しい諸目的にしたがって「変質［manipulate: 調合］させられし、合理化されざるをえない従属的諸勢力が抵抗するのも必然的であるということである。だが、支配的諸勢力のある部分、すぐなくとも支配的諸勢力の同盟諸勢力が抵抗することもある。合衆国でフォード化された産業に順応した新しい型の勤労者を育成するための一必要条件であった禁酒法が崩れたのは、いまだに遅れたままの周辺的諸勢力の反対のためにあって、産業家や労働者の反対のためでなかったことは確かである、など。

一見したところまだ第一級の問題ではないように見えるが、本質的には最も重要でし興味深い若千の問題を書き留める。⑴現在の財閥的支配層［ceto plutocrateco］を、工業生産に直接基礎をおく金融資本の新しい蓄積および分配の機構に置き換えること。⑵性問題。⑶アメリカニズムは歴史的「画
期」を構成することができるのか，すなわち，他の箇所で検討した前世紀特有の「受動的革命」型の漸進的発展を規定しうるのか，それとも逆に，もっぱら「爆発」，すなわちフランス型の変革を引き起こすべき諸要因の分子的蓄積を表現するものか，という問題。（4）ヨーロッパの人口構成 [composizione demografica] の合理化という問題。（5）発展は，産業と生産の世界内部に出発点をもたねばならないのか，それとも，生産装置の必要な発展を外側から導く法的形態的枠組を慎重かつ堅固に構築することにより，外部からでも起こしやすくなるかという問題。（6）フォード化され合理化された産業が支払いわゆる「高賃金」の問題。（7）利潤率の傾向的低落法則を克服しようとする産業側の相次ぐ試みの過程の極点としてのフォード主義。（8）国家的経済的製品により各個人に及ぼされる道德的制限の増大，この種の制限が規定する病的危機との表現としての精神分析学（戦後におけるその大流行）。（9）ロータリー・クラブとフレーメーソン。[注]。['

ア・グラムの「アメリカニズムとフォード主義」(上) 109

編者注記] 原ノートでは，列挙がこの箇所で中断しており，完成されていない。この頁の残りは10頁まで含み，白紙のままに残されている。

§<2> ヨーロッパ人口構成の合理化。ヨーロッパでは，アメリカニズムとフォード主義の若干の側面を導入するさまざまな試みは，旧時代的な財閥的支配層によっても，かれらは，両立しそうもないもの，すなわち，ヨーロッパの旧い時代錯誤的な社会一人口構造と，もっとも完成されたそのアメリカ型の，すなわちヘンリー・フォードの工業が示すような，生産と労働様式の近代的な形態を，反証されるまで両立させるつもりでいる。したがって，フォード主義の導入は，多くの「知的」「道徳的」抵抗に直面し，最も hindi強制を通じ，特別に残忍かつ策略的な形態でおこなわれる。わかりやすく言えば，ヨーロッパは，満杯の酒樽と飲んべしの女房とを取とうとしているのであって，競争力を点でフォード主義が生み出す全利益を望んでいながら，他方で，莫大な剰余価値をむさぼり食って創業費を増大させ，
国際市場での競争力をおしさげる寄生者の大群を養おうとするのである。それゆえに、アメリカヌズムに対するヨーロッパの反応は、注意深く検討されるべきであり、旧大陸の一連の国家の現状と戦後の政治的諸事件との理解するために必要な諸要因は、この分析からも多く引き出されるであろう。

アメリカヌズムは、そのもっとも完全な形態においては、アメリカではそれが「自然に」存在しているため、こうした問題を論じたアメリカ人が気にかけていない一つの前提条件を必要とする。この条件とは、『合理的人口構成』と呼びうるものであり、生産の世界で必須の機能を持たない諸階級、すなわち絶対的に寄生的な諸階級がそれほど存在しないということである。ところが、ヨーロッパの「伝統」、「文明」は、まさにこの種の階級の存在によって特徴づけられており、吏員、知識人、聖職者、土地所有者、略奪商人、軍隊（はじめ職業軍人、のちには将校を除いて徴兵）等の飽和化と化石化の現象をつうじて大量の受動的堆積物を残してきている過去の歴史の「豊かさ」と「複雑さ」からつくりだされているのである。いやましく、一国の歴史が古ければ古いほど、「先祖」の「遺産」で暮らす無為徒食の運中、これら経済史の年金生活者どもの堆積も、大規模で重圧的になると言ってよい。これらの経済的に受動的な（社会的な意味での）要素の算出は、困難ではある。というのは、直接の調査によって明確にし得るような「項目」を見い出すことが不可能だからである。だが、明らかにする指標を、間接的には、たとえば国民生活のうちの一定諸形態の存在から引き出すことができる。

大・中の中（さらには小）の工業を欠く（工場を欠く）都市型の人口集積地の著しい数は、この最も重要な指標の一つである。

いわゆる「ナポリの謎」。ナポリについてゲーテがおこなった考察と、それについてジェスティーナ・フォルトナートが論じた「はっとする」「道徳的」な結論とを想起するべきである（ゲーテと彼のナポリ人についての判断に関するフォルトナートの小冊子は、ドメニコ・ペットーニを主幹とする『批評ノート』叢書のなかのリエーテ編の文庫で再版されている）。フォル
トナートのその冊子については、確かに1912年ころの『リフォルマ・ソチャー
レ』[社会改革]所載のルイージ・エイナウディの評を読むこと。
ナポリ人の器質的な『賤民根性』という伝説をゲータが覆し、それどころか、か
れらはきわめて活動的で勤勉であることを明らかにしたのは、正しかった。
だが問題は、この勤勉の具体的な結果が何であるかを見ることにある。つま
り、この勤勉は、生産的なものでないと、生産的諸階級の必要や要求を充た
すことに向けられていないのである。ナポリは、その大部分が、南部イタ
リアの地主たち（貴族、非貴族をとわず）が地代を消費する市である。何
万ものこうした地主の家族が大小の経済の重要性を有しており、直属の使用
人は従僕を召しかかえた館をもつこれら地主家族の周りに、市の重要部分の
実生活が、手工業、巡回業等、往来をうろつぐ無為の者たちへの途方もなく
細分化された商品とサービスの即座の供給をとおして組織されている。市
のもう一つの重要部分は、運輸業と卸売り商業を中心にして組織されている。
官庁統計では、ナポリは、ミラノ、トリノ、ジェノバに次ぐイタリア第4の
産業都市に数えられているにもかかわらず、新しい財貨の創造と蓄積という
意味での「生産的」産業は比較的小さいのである。

このようなナポリの社会-経済構造（これについて今日では、協同体の地
方経済機関の活動を通じて十分正確な情報を得ることができる）が、一見矛
盾にみち、政治的難問にみちたナポリ市の歴史の大部分を説明してくれる。

ナポリの現実は、パレルモやローマ、また南部および島部イタリアの一連
の全都市群（かの有名な「百都市」）だけでなく、中部イタリア、さらには
北部イタリアの諸都市（ボローニャ、良いほうでは、パルマ、フェルラーラ
等）でも、大々的に再現される。この種の都市の多くの住民については、
「馬一頭の餉は雀百羽の御馳走」という民間の説を繰り返すことができる。

いまだ適切に研究されていないのは、以下のことである。中小の土地所有
は、耕作農民にではなく、町（cittaduzza）と村（borgo）のブルジョアシ
ーの掌握下にあり、この土地が原始的な（つまり地代を現物と労役で支払
う）折半小作あるいは永代小作に出されるのである。このため、並はずれて大量（総所得の割に）の「年金生活者」「金利生活者」なる中小のブルジョアジーが存在することになるが、かれらは、ある種の堂々たる経済文献である『カンディド』（純白）のなかで、いわゆる「貯蓄の生産者」という奇怪な縞（figura）を作り出している。つまり、この経済的に受動的な人口層は、たんに一定数の農民の原始的労働から自分の生計費を引き出すだけでなく、さらに貯蓄にも成功するのである。これは、資本の最も奇形的で不健全な蓄積様式である。なぜなら、栄養失調の限界においかれる農民からの不正な強奪的搾取に基づくとともに、節約されるわずかの資本のために、多くの場合、純寄生者の大群の高い生活水準を支えるために必要な途方もない出費に対応するからである。（中世コムーネの没落と資本家の企業精神の退廃のちイタリア半島に徐々に生じた歴史的現象、歴史的停滞を規定したある異常な状況は、歴史家のニッコロ・ドロリーノによれば、「土地への復帰」水と呼ばれ、有益な国民的進歩の指標としての役割さえも担うありさまなのである。常套句が批判的感覚を鈍らせること、かくの如し。）

絶対的な寄生的経済のもう一つの源泉は、つねに国家行政であった。レナート・スパヴェンザは、イタリアでは人口の10分の1（400万の住民）が国家予算の上に生活していると計算していた。いまでも、比較的若い（40歳を少しこえたばかりの）壮健な人が、体力・知力の盛りにありながら、25年間の国家勤務を終えた後は、もはやなんの生産的活動もせず、大なり小なりの恩給で暮らしている、ということがある。それなのに、労働者は、65歳過ぎにしか保険をもらえず、また農民には労働年齢に限界がない（だから、平均的なイタリア人は、アメリカの億万長者は意識がはっきりしているかぎりで死ぬまで現役であり続ける、ということを聞くとびっくりする）。家族に司祭がいて、この者が司教座聖堂参事会員に補せられれば、親族全体にとって「肉体労働」はたちまち「恥」となり、たださわりうるのは、せいいぜい商業ということになる。
イタリアの人口構成は、長期にわたる移民と、新しい財貨の生産労働における女性の雇用の増加から、すでに「不健全」になっていた。「潜在的」就業人口と不就業人口の比率は、ヨーロッパの中で最も悪いものの一つである（モルターラ教授のこの問題での論研究、たとえば1922年の『プロスペッティーヴェ・エコノミケ』『経済展望』掲載の諸研究を参照）。

それは、次の諸点を考慮にいれたとき、なおいっそう劣悪になる。⑴労働力の個人平均能力を低下させる風土病（マラリア等）、⑵多くの下位諸層の農民の慢性栄養失調状態（1926年の『リフォルマ・ソチャーレ』に発表されたマリオ・カミス教授の研究結果）のように、国民的平均は、階級ごとに分解されねばならない。国民的平均が、もし科学によって不可欠のものとして決められた水準によらずやく達しているとすれば、人口のうちどうでもよくはな一階層が慢性的栄養失調にあうと論づけられるのは明らかである。上院での1929-30年度予算案の審議においてムソリーニ閣下は、いくつかの州には四季をつらじて草だけで生きている人々がいると言明した。その会期の国会議事録と反動的気まぐれによってただちに首相からやり返された上院議員ウーゴ・アンコーナの演説を参照のこと。

⑷純寄生的人口と「半寄生的」人口の大群。前者は非常に目立つとともに、彼らへのサービスのため間接的に寄生的な他の巨大な集団の労働を要求する。この「半寄生的」人口も、商業や仲介業一般のような副次的経済活動を異常かつ不健全に増殖させるゆえ、前者と同類である。

このような状況は、ひとりイタリアにだけあるのではない。大なり小なり古いヨーロッパ諸国全体に存在し、最悪の形態でインドや中国にも存在する。このことが、これらの国の歴史の停滞と政治的軍事的無力を説明する。この問題の研究においては、経済的社會的組織形態が直接問題になるのではなく、現在社会体制における各種住民分層間の比率の合理性である。各々の社会体制には、人口構成におけるそれ特有の定比例の法則のような、すなわち、その『最良』の均衡と、他のあらゆる破壊要因を別にして、国民経済生活の諸源
泉を枯渇させるゆえにそれ自体で破局的でありうるような、適時の立法によって矯正されていない諸々の不均衡とがある。アメリカは偉大な『歴史的文化的伝統』をもたないが、その鉱のマントの重圧に苦しむことも全くない。生活水平が人民諸階級においてヨーロッパより高いにもかかわらず、その資本蓄積が恐ろしく巨大であることの主な理由のひとつ（いわゆる天然資源の豊かさより確実に重要な）は、これである。過去の歴史的諸段階からの遺物であるこの膠（にかわ）のような寄生的堆積物が存在しないことが、工業および、とくに商業に健全な基礎を可能ならしめており、運輸と商業に代表される経済的機能を生産に従属する実質的な活動に縮減し、さらには、この分野を生産活動そのものに吸収する試みをやはりいっそう可能ならしめる（フォードの行った諸実験や、生産された商品の輸送と販売を直接経営することにより、彼の企業が達成した節約を参照せよ10）。この節約が、生産コストに影響し、賃金の引き上げと販売価格の引き下げを可能にしている。歴史の推移によって、すでに合理化されたこうした前提諸条件が存在していたゆえに、国の全生活を生産を軸にして回転させうるのだから、強力（地域ベースでの労働組合の破壊）を説得（高賃金、各種の社会的特典、巧妙なイデオロギーの政治的宣伝）とたくみに組み合わせれば、生産と労働を合理化することが比較的容易であったのである。ヘゲモニーは工場で生まれ、その行使のためには、政治とイデオロギーの職業的媒介者は最少量しか必要でない。

ロミエがあれほど叩いている「マス」現象11とは、この型の合理化された社会の形態にほかならず、そこでは、「構造」がより直接的に上部諸構造を支配し、その上部諸構造が「合理化され」（単純化され、数値的に縮減され）る。

ロータリー・クラブとフリー・メーソン（ロータリーは、小ブルジョアなしの、そして小ブルジョア的精神性状なしの、フリー・メーソンである）。アメリカはロータリーとYMCAをもち、ヨーロッパはフリー・メーソンと
イェズス会をもって。イタリアにおける YMCA 導入の試み。この試みにイタリア産業が与えた援助（アーネッリの資金供与とカトリックの猛烈な反発）と。労働者大衆に受け入れられる固有の形態での「アメリカニズム」を支持した『オルディーネ・ヌオーヴォ』 [新しい秩序] グループを吸収しようとしたアーネッリの試み。

アメリカでは、合理化が労働と生産過程の新しい型に順応した新しい型の人間を練り上げる必然性を規定している。この練り上げは、これまでのところでは、初期段階にすぎず。それゆえ、牧歌的段階に（見かけ上は）とどまっている。いまだ高賃金によって追求される、新産業構造への心理的-肉体的適応の段階であり、散発的なものは以外には、いかなる「上部構造的」開花もまだ（1929年の恐慌以前では）確認されていない。つまり、ヘゲモニーの基本問題はなおも提起されていなかったのである。闘争は、ヨーロッパの古い兵器帯から持ち出されてさらに退化した兵器でやっており、したがって、「事物」の発展に比べればなおさら「時代錯誤的」である。アメリカで展開されている闘争は（フィリップの言によれば）と、いまだに「産業の自由」に対抗する職能特権 [proprietà del mestiere] のための闘争、すなわち条件は異なるにせよ、ヨーロッパで18世紀に展開されたのと類似の闘争である。アメリカの労働組合は、主として熟練資格をもつ労働者たちの職能特権の同業組合的表現であり、それゆえに、産業家たちが要求するその破壊には「進歩的」な一面がある。経済領域においてもフランス革命の刻印を受けてるヨーロッパ的な歴史段階を欠くために、アメリカの人民大衆は粗野な状態により残されてきた。これに、国民的等質性の欠如、文化的一人種的雑居、黑人問題がつけ加わる。

イタリアでは、フォード主義のファンファーレはすでに鳴っている（大都市の繁栄、大ミラノ調整計画など。資本主義はいまだお揺籃期にあり、したがって、雄大な発展の枠組を準備する必要がある、等々の主張。この主張については、『リフォルマ・ソチャーレ』掲載の、いくつかのスキャーヴィ論
文を参照のこと）

とばれど、農村主義は啓蒙主義の都市の視野への転換、職能身分や牧歌的な家父長主義の発揚、「熟練労働者の職能特権」と産業の自由に反対する闘争とへの言及などが、起こっている。しかしながら、たとえ、その展開が緩慢で、包括的な予防を完備していたとしても、そのことは、その保守的成分、つまり、そのすべての寄生的残存物によるヨーロッパの旧文化を代表する部分が、敵対をもたないということを意味しない（この観点から興味深いのは、『スオーヴォ・ストゥーディ』（新しい研究）と、『クリティカ・ファシスタ』（ファシスト評論）およびピサ大学を中心に組織されている協同体研究の知的中核に代表され傾向である）。

ド・マンの著書も、それなりに、ヨーロッパの旧い枠組をひっくり返すという如上の問題の一表現ではあるが、偉大さを欠く、世界を争ういかなる歴史的勢力にも与しない一表現である。

[編者註記] Q1, 53-55頁、参照。

§＜３＞ 性問題のいくつかの側面。性の問題に関する強誘観念と、このような強誘観念の危険。すべての「プランナー」は、性問題を前面に据え、それを「無垢」に解決する。「ユートピア」のなかでは性問題が大きな部分、しばしば主要な部分を占めていることを指摘する必要がある（『太陽の都』におけるランバネッラの解決策は、カラブリア農民の性的欲求を説明できないとするクローチェの所見は、あたっていない）。性本能は、発展しつつある社会集団の側からすくさまより大きな圧力をうける本能である。性本能の「規制 [regolamento]」は、それがもたらす諸矛盾を、そこで起因するとされる倒錯のために、もっとも「不自然な」ように見え、だから、この領域では「自然」に帰属という呼びかけがもっとも頻繁である。そして「精神分析学的」文献も、性（親子関係を含む）の基礎上で「野性人」という新しい神話をつくりだすことにより、しばしば「啓蒙主義的」な形態で、性本能の規制を批判する一様式である。
この領域での都市と農村との分離。だが、牧歌的な意味での農村ではなく、そこでは、もっとも奇怪で多数の性犯罪が発生しており、猟撃と男色がそうとうひろがっている。1911年の国会調査では、アブルッネョ州とパンツリカ州には（そこでは、宗教的狂信と家父長主義が都市的観念の影響をうわまわっており、セルビエーリによれば、1919-20年には、農民の争議が皆無であったほどである）24、30パーセントの家族に親相姦があると言われているが、この状況が最近までに変わったとは思われない。

生殖機能としての性と「スポーツ」としての性。女性に関する「美的」理想は、「子生み用の牝馬」と「玩具」との間を揺れ動いている。だが、性が「スポーツ」になるのは、都市においてだけでなく。通俗的なことわざに「男は獣師、女は誘惑者」、「よいことがなければ、女房と寝よ」などとあるのは、農村にも、その同一階級の人々の間の性関係においてスポーツ的観念がひろがっていることを示している。

生殖[reproduzione]の経済的機能。これは、生産のため、そしてまた人口の非就業部分（年齢や疾病のためなどの正常な理由で非就業の）の扶養のために、社会は各種年齢層の間に一定の比率を必要とするという。総体としての社会全体にかかわる一般的な問題であるだけでなく、家族のような最小の経済集団内部の「分子的」問題でもある。「老人の杖」という語句は、社会の全領域にわたって青年層と老年層とのあいだに一定の比率が存在するという経済的必要の本能的自覚を表す。子のいない老人男女が村ではどのようにいじめられるかという情景が、夫婦に子供をほしがるように仕向けている（「一人の母親は百人の子を育てるが、百人の子は一人の母親も養わない」という諺は、問題の別の側面を示す）。つまり、人民諸階級の子のない老人は、「私生子」同様の扱いをうけるのである。

人間の平均寿命を引き上げてきた保健・衛生の進歩は、ますます、性問題を経済問題の基本的かつ自立的な一侧面として位置づけるが、次いで、このような側面が「上部構造」の型という複雑な諸問題を提起せずにほかならない。
フランスにおける平均寿命の伸張は、低い出生率と、きわめて高価で複雑な生産装置を稼働させる必要とがあいまって、ここにもすでに国民的問題に属するいくつかの問題を提起している。すなわち、老年世代は同じ国民文化の青年世代とのますます異なる関係に置かれてきているし、勤労大衆のなかでは移民外国人労働者がふくれあげている。後者は、土台を変容させるものであり、すでに、アメリカの場合のように、ある分業が生じている（自国民には、管理ないし組織の職能のほかに熟練労働、移民には不熟練労働）。

これと類似の関係が、ただしそうしく不経済な結果をもなって、一連の国家すべてにわたり出生率の低い工業都市と多産の農村とのあいだに存在する。産業における生活は、一つの一般的な実習期間、すなわち労働や食生活、居住、習慣、等々のある一定条件への精神的-肉体的適応の過程を必要とするが、それらは、生得の「自然的」なものでなく、獲得されねばならないものである。ところが、獲得された都市的性格は遺伝によって受け継がれる。すなわち、幼年期から青年期への成長において吸収される。こうして、出生率の低い都市は、不断の新しい流入者たちの実習期間のために、たえず著しい出費を求めることになるのであるが、それにともなってまた、都市の社会的-政治的構成の絶えざる変動をもたらし、ヘゴモノーの問題を不断に新しい土台のうえに提起する。

性問題につながるもっとも重要な倫理的-市民的問題は、女性の新しい人格形成の問題である。女性が、男性に対する実際上の【reale】自立だけでなく、自己自身と性関係における自己の役割【parte】との新しい理解の仕方をも獲得するまでは、性問題は病的価格をたくさん残し、どんな法的革新においても慎重であることが必要となる。性の領域での一方的強制によるあらゆる危機は、それにともなって、公娼制度の廃止によって激化する「ロマンチックな」破綻を引き起こす。すべてこれらの要素は、性関係のあらゆる法的規制と、生産と労働の新しい方式に順応する新しい性倫理とを創造しようとするあらゆる試みとを混乱させ、きわめて困難にするものである。それ
にして、このような法的規制と新しい倫理の創造に着手することが必要である。明らかにすべきは、産業家たち（特にファード）は、従業員の性関係や、一般に従業員の家族内の全般的な秩序づけ sistemazione に関心をよせていることである。この関心が帯びている「清教徒主義」の外見に（禁酒法の場合と同様に）感わされるべきでない。真実は、生産と労働の合理化が求める新しい型の人間を育成することは、性本能がそれに順応するように規制され、合理化されしっかりができ、できないということにある。

[編者注記] Q 1, 55頁一56頁, 参照。

§4 、「都市派と農土派」の問題に関する幾人かの言明。『フィエーラ・レッテラリア』 [文学雑踏] 1928年1月15日号掲載の一節。ジョヴァンニ・バビーニによれば、「都市は、創造して消費する。畑や鉱山からもぎとられてきた財貨が流入する集散地であるのと同様、そこには地方のより清新な精神や弧高の理念が駆け寄ってくる。都市は、都市から遠いところで、時にそれに対立して創造されたものを燃やして輝かせる火刑台の薪のようなものである。都市はすべて不毛だ。都市はこれに見合って子供をほんのわずかしか生まれず、天才はほとんど生まれない。都市には享楽はあるが、創造がない。愛があっても出産はなく、消費はあっても生産がない」。[EMR(たくさんの「絶対的」なバカさがけんは別にして、バビーニが、農業地代の消費者と売春宿のコブレンツァ市の都市でないような、都市の「相対的」モデルを予めもっていることを指摘すべきである。]

同号の『フィエーラ・レッテラリア』に次の一節を読む。「われわれ農土派の焼き肉は、次のような文字が焼き印されて供される。すなわち、あらゆる形態の都市に対する決然たる嫌悪、これである。都市は、われわれに合わないか、あるいは、消化しやすくないのでイタリア人の古典的才能を隠してしまう。次には、くに paese の普遍的な意味、すなわち一言すれば、個人とその土地との自然的内在的関係、の擁護であり、最後には、生活のあら
ゆる分野と活動におけるわれわれの諸特質，すなわち，カトリック的な基礎，世界的な宗教的意味，基本的な単純さや簡素さ，現実への忠实さ，空想力の支配，精神と物質の均衡，の賞揚である」。9（注意すべきこと。都市の形成と発展なしで，つまり統一推進者たる都市市民の影響力なしで，どうして今日のイタリア，イタリア国民がありえようか。過去の「農土主義」は農土愛を意味していたが，まさしくそれは，人民の解体と外国の支配をも意味していたのである。カトリック自体，もし法王がローマに定住するのではなく，転々と居住地を移し替えていたとしても，発展したであろうか？）

以下は，フランチェスコ・メリーノの判決（ポーラーの『アッサルト』（突撃）所載の）である。「哲学の分野において，私は本当の対立を見付けたのだと思う。それは，100年以上も前の対立であり，常に新しい様相をとるのであるが，すなわち，都市派に同定するるもの，プラグマチズム，行動主義，農土派に同定するもの，啓蒙主義，合理主義，歴史主義との対立である」。9（つまり，不滅の諸原理は農土派に逃げ込んだわけではない）。いずれにせよ注意すべきは，都市派と都市派との論争は，寄生的保守主義とイタリア社会の革新的傾向との論争のシャボンの泡以外の何ものでもないことである。

『スタンパ』（出版人）1929年5月4日号にミーノ・マッカーリは書いている。「農土派が，近代主義的来品に反対するとき，その反対は，有害な接触が，有益でありうるものを混入させることで，何世紀も経て純化され今や統一的な総合を熱望している（！）イタリア文明の固有の性質や特色の完全性を壊してしまうのを阻止するために，選択の権利を持たたいがためである」。9（すでに「純化され」はいるが，「総合」も「統一」もされていないとは！！）。

[編者注記] Q1，61裏—62頁，および66裏頁，参照。

§＜5＞エウジェニオ・ジョベッティは，『ベガソ』[ベガサス] 1929
年5月号に「フレデリック・チェーラーとフォード主義」なる論文を書いているが、そこで次のように言っている。「一般化の修辞学で養われた文学的エネルギーは、つねにますます個別化され先鋭になる技術的エネルギー、すなわち並はずれた意思と専門教育とのきわめて独創的なこの織物を、今日もはや、結局のところ理解しようの立場にはない。エネルギーの文学は、鎖を解かれたプロメテウス——あまりに安易な表現ではあるが——に留まっている。技術文明の英雄は、鎖を解かれた者でない。かれは、自分の鎖を天まで運ぶ術をしている沈黙者なのである。かれは、歌曲を享楽する無学者ではなく、最も古典的な意味で研究家である。というほど、研究【studiumi】とは、「活きた先端」を意味していたからである。技術文明、あるいはそう言いたけば機械文明が、その鋭角型の英雄を黙々と練りあげている間に、エネルギーの文学的崇拝は、虚ろなほどでなし、熱狂した役立たずしか生み出さない。」

指摘すべきなのは、「定式に表現されないが、行為で主張される哲学」というジェンティーレの原則をアメリカニズムに適用することが追求されていない事であることである。このことは、意味深で教訓的である。というのは、もしその定式に価値があるとするならば、それを要求しようのは、まさにアメリカニズムであるからである。ところが逆に、アメリカニズムを語る段になると、それは、やれ「機械論的」であるとか、やれ粗野であるとか、あるいは残酷であるとか、つまり「純粋行為」であるとされ、伝統などに対置されたものである。だが、いかに「哲学は行為で主張される」と言っても、やはりそれに反してあの諸運動の諸定式に表現されている哲学として、なぜこの伝統などを哲学的基礎としてさえも、採用することにならないのであろうか。この矛盾は多くのことを、したがってたとえば、次の相違をも説明してくれる。すなわち、人間であれ、その外の現実（すなわち現実の文化）であれ、それらを本質的に変えるアメリカニズムのような現実的行為と、自ら行動を宣言して言葉だけは変わるが事物を変えず、外的的挙動を変えるが内面
的人間を変えない愚かな剣闘行為、この両者の相違をである。前者は、その対象的活動に内在し沈黙を好む未来を刻々と創造しつづけている。後者が創り上げるのは、あらかじめ定められている修辞学的複製画を切って完成された操り人形であり、それに動きと生命を与える外部の糸が切れば、とたんに動かず倒れてしまうだろう。

【編者注記】 Q1, 61頁—62頁およびその裏頁、参照。

§ 6 > 工業の金融的アウタルキー。カルロ・バーニの注目すべき論文「協同体主義【corporativismo】の純粋理論の試みについて」（『リフォルマ・ソチャーレ』1929年5月号）は、マッシモ・フォーヴェルの著書『経済と協同体主義』（フェルラーラ、S. A. T. A. 社、1929年）を検討し、同じフォーヴェルの別著『組合国家【Satato Sindacale】における収入と給料』（ローマ、1928年）にもふれている。だが、これらの著作のなかでフォーヴェルが、最先進的な生産様式・労働様式のアメリカ的システムをイタリアに導入するための前段として「協同体主義」を構想していることに気づいていないか、あるいははっきりと浮び上がらせていなかったか、あるいははっきりと浮び上がらせていなかったか。

興味深いのは、フォーヴェルが「自分の脳味噌をしばって」書いているのか、あるいは、背後に（たんに「一般的」にではなく、実際に）彼を支持し、押し動かす活性の経済的勢力があるのかどうかを、知ることである。知識は、純粋」知識人であってさえ常に一定の傾向を表明するものであり、同様に「純粋」の学者もまた一定の傾向を表明するものではあるが、これまでフォーヴェルが「純粋」の学者であったことは決してない。彼は、多くの面で、チコッティ、ナルディ、バッティ、プレツィオーネ等と同等の型に属するが、しかし、もっと複雑であり、彼の知的価値には否定しがたいものがある。フォーヴェルは、物を持つ指導者になるようとついに熱望して来たが、いくつかの基本的資質を欠くために成功していない。つまり、唯一の目的をめざす意思の力に乏しく、ミッショーリ型の知的気粉えに陥り易く、その上
あまりにもしばしば、いかがわしい卑小な利害にあまりにもはっきりと結びついてきたのである。かれは戦前、「青年急進派」として出発し、より具体的で近代的な内容を与えることで伝統的民主主義運動を若返らせたいと思い、共和派、特に連邦派と地方分立派（オリヴィエーロ・ツッカリーニの『チッタ・ポリティカ』[政治都市]）に少しばかり媚を売っていた。戦中は、ジョリッティ派中立論者であった。1919年にボローニャの社会党に加入したが、休戦以前には『アデンティ！』[前進]に一度も執筆しておらず、その後トリノに去った。トリノの工業家たちは、立て直して自分たちの直属の機関誌にするため、古くさくて不評の『ガゼッタ・デ・トリーノ』[トリノ新聞]を買取ろうとしていた。フォーヴェルは、その新しい新聞の編集長になりたいと思っていて、かれが産業界と接触していたのは確実である。ところが、編集長に招かれたのは、「青年自由派」のトマーノ・ボレッリで、やがて『イデーネ・ナツィオナーレ』[国民思想]の主幹イタロ・ミジニがその後を継ぐ（しかし、その『ガゼッタ・デ・トリーノ』は、地元[paese]の名を冠してさえいたし、その発展のため大金も惜し気なく投ぜられたにもかかわらず、根付かず、そのスポンサーによって廃刊になった）。1919年のフォーヴェルからの「奇妙な」手紙。かれは、週刊『オルディーネ・ヌオーヴァ』に協力する「義務を感じた」と書いてきたので、かれが協力できる範囲を定めようとする返信を出したのだが、その後、「義務の声」は突然沈黙した。フォーヴェルは、バッシーリ、マルッリ、ガルデッジら一党に加わったが、この徒党は、トリノの『ラボラトーレ』[労働者]をかなり金になる事業の本部としていて、トリノ産業界との接触があるにもかかわらず、1919年、『オルディーネ・ヌオーヴァ』をトリエステに移そうとしたパッシーリの試みの理由は、「商業的に」儲ける問題にあった（それを示すために、パッシーリが直接話し合うためトリノを訪れ、100リラの寄付をした件を参照のこと）が、ここでも、「紳士」が『ラボラトーレ』に協力できるかどうか、問題だったということである。1921年、『ラボラトーレ』の事務
所でフォーヴェルとガルデンギとのものである書類が見つかったが、そこから分かったことは、＝コラ＝＝ヴェッキ系のサンディカルリストが指導したストライキの最中に、彼ら悪友たちは取引所で縦縦相場の投機をしており、また自分たちの賭博の利害にそって『ラポラトーレ』を導いたということである。
リボルノ以降、フォーヴェルは、ある時期、自分について語るのをやめていた。1925年再び、だが今度は、ネンニとガルデンギとが主宰する『アバンティ！』の寄稿者として現れる。そして、アメリカの資本に対するイタリア産業の受け入れ [infeudamento] に賛成するキャンペーンに着手したが、すぐさま、このキャンペーンは、SIT [ビエモンテ水力発電会社] の技師・ボンティと発が『ガゼッタ・デル・ポーポロ』 [人民新聞] に大いに利用された (だが、すでに事前に同意されていた)。
フォーヴェルは、1925年から1926年にかけて『ヴォーチェ・レパブリカ』 [共和派の声] に何度も寄稿していた。今日 (1929年) では、アメリカ化のイタリア的一形態への前段として協同体主義を支持し、フェルラーラ主幹の『コリエン・パダーノ』 [ポー川通信] や、『ヌオーヴィ・ストゥーデオ』 [新しい研究], 『ヌオーヴィ・プロブレーミ』 [新しい諸問題], 『プロブレーミ・デル・ラヴォーロ』 [労働の諸問題] 等に寄稿し、またフェルラーラ大学で教鞭をとっている (と思われる)。
バーニの要約したフォーヴェルのデータのなかで重要と思われるものは、剩余価値のあまりに大きな部分を刈り取って収奪する社会の半封建的寄生的諸要素、すなわち、いわゆる「貯蓄の生産者」に対抗して、イタリアの経済装置を新たに発展させる問題を、近代的な、すぐれて資本主義的な意味で解決すべきものとされている自律的な工業-生産ブロックとしての協同体という彼の概念である。すなわち、貯蓄の生産は、剩余価値量の増大に加えてより高い給与も可能ならしめるコスト低減による生産の発展を通じて、生産ブロック自体の（価格低下に基づく）内部機能にかわり、その結果、国内市場の拡大と労働者の一定の貯蓄、より高い利潤をもたらされることになるだろう。
う。こうして、企業自身の胎内で、だから、実際に大食漢である「貯蓄の生産者たち」の媒介を絶ないで、資本蓄積をいう促進する律動を得ることになる。工業一生涯ブラックにおいては、管理のもっとも「使い古し」意味での「資本主義的」諸要素に対して、技術的諸要素（経営と労働）が優越すること、つまり、大実業家と小ブルジョア貯蓄家の同盟に対して、組合に結集し、したがって生産協同体を構成する唯一の能力をもつ、生産に直接有効な諸要素全体のブロックが取って替わることになる。ものである（最後の結論からスピリットによって論ぜられているのが、所有協同体なるものである）。バーニは、フォーヴェルに対して、その論述は、新しい政治経済学でなく、新しい経済政策にすぎないと反論している。だが、この反論は、ある点では重要性をもつが、主要な論点に触れていな形式論である。その他の反論は、具体的には、イタリアの環境には、経済装置の「組織的」変革に比べていくつかの遅れの側面があることの確認でしかない。フォーヴェルの最大の欠陥は、イタリアでは工業家に対する貯蓄家の不信のため常に国家にあった経済機能を顧みず、また協同体路線の起源が、工業の技術的諸条件変革の要求や、何らかの新しい経済政策の要求でさえなくて、むしろこれまで、経済警察[polizia economica]の要求、すなわち、なおも進行中の1929年恐慌によっていっそう增大したこの要求にあったという事実を無視している点にある。実際には、イタリアの労働者[maestrainze]は、個人としても組合としても、能動的にも受動的でも、コストの低減や労働の合理化、より完全な自動的作業や企業総体の改良された技術的組織の導入等に資する技術革新に反対したことなど決してなかった。一度としてなかったのである。だがアメリカでは、このことが起こり、それが、自由な労働組合の半解体状態と、分断された（労働者間で）企業別の労働者組織という体制への置き換えを招いてきた。逆にイタリアでは、企業労働組合組織のセンターにしようとするささやかで控えめの試み（企業の労働者経営信任委員[fiduciari]の問題を想起せよ）でさえ、ことごとく猛烈
な反撃をうけ、容赦なく挫折されられてきた。1922年以前の、さらに恐らくは1926年以前までの、イタリアの歴史を綿密に分析すれば、外面的ならんちき騒ぎに眩惑されず労働運動の内奥のモチーフを把握する術を心得ているかぎり、反対の結論に、すなわち、イタリア労働者の独自性が最近代的な新しい工業的要求の担い手であったことにあり、労働者は、自分たちのやり方でその要求を勇敢に主張したのだ、という結論に到達せざるをえない。幾人かの工業家は、この運動を理解し、その買収に努めたとも言えよう（『オルディーノ・ヌオーヴォ』とその教習所をフィアット複合体に吸収し⑧、「合理化された」システムで工業と労働を変革するため専門的な労働者と技術者との教習所を設けたようとしたアニュェリの試みは、このように説明されるべきである。YMCAは、抽象的な「アメリカニズム」の講座を開設したが、多額の出費にもかかわらず、この講座は失敗した）⑨。

以上の考察を別にしても、他に一連の諸問題が存在する。協同体運動は現に存在しており、いくつかの面ですでになされた法制的実現は、技術的経済的変革が大規模に生じる形式的諸条件を創出している。というのも、労働者たちが反対もしやすく、みずからがその旗手になるための闘争もなしえないからである。協同体組織は、こうした変革の形態になりうるが、しかし問題は次の点にある。すなわち、人間がそれを定めて望むことなしにでも歴史の命令に服従するという、かのヴィーコ流の「理性的狡智」の一つが見られるだろうかということである。目下のところ、疑わしい。これまで、「経済警察」という否定的要素の方が、たとえ古い産業主義の枠内とはいえ国の社会化経済構造を革新し近代化する新しい経済政策の要求という肯定的要素に優越している。可能な法制的形態は、一つの条件ではあっても、唯一の条件ではなく、最重の条件ではさえもない。直接的諸条件のうちも最も重要なものにすぎない。アメリカ化は、ある一定の環境、ある一定の社会構造（もしくは、それを創出しようとする決定的意志）、そしてある種の型の国家を必要とする。その国家は、自由な国家 [Stato liberale] であるが、自由貿易主義や実際
の政治的自由という意味でのそれでなく、それ自身の歴史的発展を通じて自
前の手段で工業的集中と独占の体制に「市民社会」として到達する自由な創
業と経済の個人主義という最も基本的な意味でのそれである。半封建型の金
利生活者の死は、イタリアでは工業変革の最大条件の一つであって（部分的
には変革そのものである）、結果ではない。国家の経済・財政政策は、この
よな死の道具である。公債の償還、証券の記名、そして国家予算の歳入構成
における間接税に対する直接税の比重増大など。だが、これらが財政政策の
方針になっている、あるいはなりつつあるとは思われない。いや、それどこ
ろではない。国家は新しい金利生活者を生み出している。つまり、貯蓄の寄
生的蓄積という古い形態を助長し、社会の閉鎖区画の創出に頼っているので
ある。現実にはこれまで、協同体路線は、中間諸階級の除去でなく、ぐらつ
いているその地位を支えるために機能してきたし、また、推進のパネルでな
く、古い土台のうえに発生した法定の諸利害のために既存勢力を保守する機
構に、そのままですますますなるのが常だった。なぜか？協同体路線は、失
業に依拠さえしているからである。それは、就業者に対しては、ある一定限
の最低生活を保護するが、もし競争が自由であれば、おそらく重大な社会的
変動をひき起こして崩壊してしまうであろうものである。だから、中
間諸階級の失業者のために、組織的ではあるが生産的でない新しい型の就業
が生み出されるのである。とはいえ、出口はやはり残されている。協同体路
線は、恐るべき破局を避けつつある何としてでも不可欠の均衡を保持す
る必要のある微妙な情勢に依存して生まれているが、ほとんど気づき得ない
ようなわめて緩漫なテンポでなら、不意の衝撃を受けずに社会構造を変え
る諸段階を進むことができるかもしれない。赤い坊ささえ、よりしっかりと
くるむほど、よく育ち、なおも成長するものだ。まさにここにこそ、フォー
ウェルが自分自身の声で語っているのか、あるいは、あらゆる犠牲を払って
も自己の道を追求する経済的諸勢力の代弁者なのを、知ることが興味深い
わけがある。いずれにせよ、その過程は非常に長期にわたるものであり、幾
多の困難に直面し、その間に、新しい利害が形成されて、新しい強靭な反対勢力が、それを挫折させるまでに発展するであろう。

［編者註記］ Q1, 86裏—89頁，参照。

§＜7＞．ミーア・マッカリーとアメリカニズム。ミーア・マッカリーの『郷土派の愉楽』（フェレンツェ，ヴァレッキ社，1928年）より。

きらきら光るペンダントのために／君の故郷を安売りするな／外国人はベネン師だ／耳を貸すのは無用なことさ／君が世故にたけた利口者なら／どんな混ざり物も遠ざけておく／これで儲けるのはいつもあのよそ者だ／君の持ち物は一つの世界に値する／君の教区の司祭さまのがっぺる方が／アメリカとその自惚れよりもましなのだ／いまのイタリア人の背後にあるものは／百世紀の歴史／＜…＞ナイト・クラブとチャールストンは／君の気をふれさせる／おおイタリア人よトスカーナ踊りを取り戻せ／引き帰って胃の腑を食べよ／イタリア人よ土塊に戻れ／フランスの流行を信ずるな／パンと玉葱を食べるように気を配れ／さすれば、腹もしっかり持ちこたえるだろう”。

しかし、マッカリーは、トリノの『スタンバ』の編集長になり、イタリアの最も都市派的で工業的な中心地でパンと玉葱を食べることになった。

［編者註記］ Q1, 90頁，参照。

§＜8＞．量と質。これは、生産の世界においては「安値」と「高値」すなわち、人民諸階級の基本的必要の充足か否か、またこの諸階級の生活水準の上昇傾向か下降傾向か、ということ以外の何ものも意味しない。残余のことはすべて、連載イデオロギー小説にかかわらない。グリエルモ・フェッレーロは、その第1回目の執筆者である“。利用しうる働き手は多いが原料はわずか（このことは、各々の民族—企業は自己の原料を「自分で創る」ので議論の余地はある）であるような企業—民族においては、「質を！」というモットーが意味することは、ただ一つ、少ない材料に多くの労働を用いて
申し分のない究極の完成品を創ろうとする意思、すなわち、高級品市場向けに専門化しようとする意思である。だが、人口が多い民族全体にとって、これはずつ、可能であろうか。

原料が大量に存在しているところでは、量的と質的の二方向が可能であるが、いわゆる持たざる国にとっては、相互的には存在しない。量的生産はまた、質的生産でもありうる。すなわち、「洗練された」物品の消費者階級で新しく形成されたために伝統主義的でない部分の間では、もっぱら質的な産業に対して競争をしかけることができるということである。このような注解は、「質」という基準が共通に設定されるものとして受け入れられる場合には妥当であるとしても、合理的な基準ではない。実際には「質」について語ることのできるのは、個人的な芸術作品と再生産不能の製品に関してだけである。再生産可能の製品はすべて、「量」の領域にたとえども、大量生産が可能である。

さらに指摘しうるのは、次のことである。すなわち、仮に一国民が「質的」生産に特化されるとしたら、貧困諸階級の消費対象はいかなる産業が用意するのだろうか、ということである。国際分業の状況が促進されるのだろうか。問題は、ほかならず、それらは暇な文筆業者や、空中楼閣を建ててデマゴギーを飛ばす扁動政治家による定式にすぎない、という点にある。質とは、事物にではなく、人間に帰すべきであろう。人間の質は、人間がより多くの必要を充たし、そしてそこから自らを独立させる度合いに応じて向上し洗練される。より多数の人々を特定の活動につなぎとめておくとする事実に起因するパンの高価格は、栄養失調をもたらす。質の政治はほとんど常に、その対立物、すなわち質を剥奪された量を規定するのである。

[編著者註記] Q1, 91頁、参照。

§ 9 ＜．＞ A・デ・ビエトリ・トネリが『リヴィスタ・ディ・ポリティカ・エコノミカ』[経済政策雑誌]（1930年2月号）に発表した、アンソニー
・M・ルードヴィッチの著書『婦人。一擁護』（第2版，1929，ロンドン）についての書評から。「国民の基本的能率の衰退のために、その国の社会構造が悪化するとき——とルードヴィッチは主張するのであるが——、つねに二つの異なる傾向が顕著になるように思われる。第一は、古い健全な（！）諸制度の騒乱と崩壊のまったく単なる兆候であるにすぎない諸変化を、進歩のしるしと解釈する傾向である。第二には、統治階級への信頼の当然の喪失に起因するもので、必要な資格があろうがなかろうが事態収拾のため努力するよう指示されているという確信を各人に与える傾向である」。①（明かに翻訳は、あいまいで不正確である）。著者は、フェミニズムをこの第二の傾の一表現とし、「マスキリズム」の復権を要求しているのである。

※・ピエトリ・トネリの訳文があいまいであるため難解ではあるが、その反フェミニズム的でマスキリズム的な傾向を指摘しておくべきである。一連の「センチメンタルな」ないし疑似センチメンタルな仮装のすべてにわたって女性に大変有利なアングロサクソン法の起源が研究されるべきである。問題は、性問題を規制する試みであり、この点でまじめな仕事をすることであるが、著者の目的は達成されていないように見える。かれは、悪い意味での「フェミニズム的」な病的逸脱の余地を与え、女性（上流階級の）に逆説的な社会的地位をつくりあげている。

[編者著記] Q1., 91頁～92頁、参照。

[編者]

註 記

§1. 「アメリカニズムとフォード主義」という――

B稿。

§2. エースンルー人口構成の合理化

C稿。A稿は、Q1 §61「アメリカニズム」[大月版，170-174頁]。

1）Q1 §61の注1 [大月版，508頁]，参照。

2）Q1 §61の注2 [大月版，508頁]，参照。

3）グラムジは，この情報を受け入れ，またその後は続いてフォルンス [の所]で，
自由に利用した統計の出版物から得ることができた。例えば、政府中央統計局監修の次の出版物などから。『イタリア統計年報』1929年、第Ⅲ巻、『イタリア統計概要』1934年、第Ⅷ巻、政府印刷局、ローマ、1934年（グラムシ文庫）、『イタリア統計概要』1935年、第Ⅸ巻、政府印刷局、ローマ、1935年（グラムシ文庫）。

4）グラムシがここで示しているのは、おそらく、ニッコロ・ロドリーコ「イタリア史における土地への復帰」『新作品集』1934年2月16日、543-55頁所収、である。

5）ここでお話の数で示されているのは、レナート・スバベンダーの著作のなかでとりあげられている若干のデータである。その著作は、すでに別のノートで指摘されている。Q9 § 71および注2、3を参照。

6）Q1 § 61の注3 [大月版、508頁]、参照。

7）Q1 § 61の注4 [大月版、508頁]、参照。

8）Q1 § 61の注5 [大月版、508頁]、参照。ここでグラムシは、A稿でのこの点の補足のために、すでに引き合いに出された演説（上記注2、参照）のなかで、マイエール上院議員が特に反論していたところのウタイム・アンコーナ上院議員の演説（『国会議事録。上院』1136-48頁、特に「いつも全体に、どこもかしこもいたるところに金を過度に使おうとしている」と言っている1144頁、参照）に言及している。

9）「定比例の法則」については、Q9 § 62 [さちあたり、このC稿：Q13 § 31の邦訳、合同版、第Ⅸ巻、13-15頁]、参照。

10）Q1 § 61の注6 [大月版、509頁]、参照。

11）Q1 § 61の注7 [大月版、509頁]、参照。

12）グラムシがここで言及しているエピソードの事実関係を推定することはできないが、そのことは、『オルディーネ・ヌオーボ』派の時期に遡ることであろう。終戦直後 [第一次大戦の] の数年後以降、カトリックの教階制組織はイタリアにおけるYMCAの浸透に対抗するキャンペーンを開始した。このことについては、とりわけ『ラ・チビルタ・カットリカ』 [カトリック文明] に見える数多くの記事が証拠を示している。たとえば、無署名論文『イタリアのプロテスタント的労働』『ラ・チビルタ・カットリカ』1991年5月3日号（LXX年次号、第Ⅱ巻）、230-44頁、掲載、『イタリアのプロテスタント的労働についての再論』同上、1920年8月4日号（LXX年次号、第Ⅲ巻）、427-37頁掲載、参照。

13）Q1 § 61の注9 [大月版、509頁]、参照。
14）Q1 § 61の注10 [大月版，p.509]，参照。
15）Q1 § 61校注11 [大月版，p.509]，参照。
16）ビナ王立大学の協同体学派の一団が，1928年に結成された。1933年には，サンクソーニを編集長とする研究叢書の公刊が開始された。グラムシは，その最初の数巻をフォルミア [の醫院] で受け取っている。以下を参照。G・ビロー，W・ゾンベルト，E・F・M・ダービン，E・M・バターソン，U・スピリト，サンソーニの共著『資本主義の批判』フィレンツェ，1933年（グラムシ文庫）。L・プロカード，C・ランダイア，J・A・ホプソン，L・L・ローヴィン，G・ドッベルト，U・スピリト，サンソーニの共同研究『計画経済』フィレンツェ，1933年（グラムシ文庫）。ウーゴ・スピリト『資本主義と協同体主義』サンソーニ社，フィレンツェ，1933年（グラムシ文庫）。
17）Q1 § 61の注13 [大月版，p.510]，参照。
§ 3. 性問題のいくつかの側面
C稿。A稿は，Q1 § 62「性問題」[大月版，p.174-175]。
1）Q1 § 62の注1 [大月版，p.510]，参照。
2）セルビエリ『戦争とイタリア農村諸階級』を参照。このデータは，おそらく，同書の277頁にある1919年-20年の諸州のストライキ参加者の数とパーセンテージに関する表から取られたして
3）Q1 § 62の注2 [大月版，p.510]，参照。
§ 4. 「都市派と郷土派」の問題に関する幾人かの言明
C稿。A稿は，Q1 § 74「都市派と郷土派」および § 91「郷土派」[大月版，p.187-188
頁およびp.198]。
1）Q1 § 74年注1 [大月版，p.518]，参照。
2）Q1 § 74の注2 [大月版，p.518]，参照。
3）Q1 § 74の注3 [大月版，p.518]，参照。
4）Q1 § 91の注1 [大月版，p.521]，参照。
§ 5. エウジェニオ・ラボネッティ
C稿。A稿は，Q1 § 92「アメリカニズムについて」[大月版，p.198-199]。
1）Q1 § 92の注1 [大月版，p.521]，参照。
2）Q1 § 87とその注1 [大月版，p.194-195およびp.520]，その注はQ1 § 92の注
2 [大月版，p.521]，参照。
§ 6. 工業の金融的アウタルキー
C稿。A稿は，Q1 § 135 [大月版，p.239-243]。
1）Q1 § 135の注1 [大月版，p.536]，参照。
A・グラムシ「アメリカニズムとフォード主義」（上）

2）Q1 § 135の注 2 〔大月版，536頁〕，参照。
3）Q1 § 135の注 3 〔大月版，536頁〕，参照。
4）Q1 § 135の注 4 〔大月版，536頁〕，参照。
5）Q1 § 135の注 5 〔大月版，536頁〕，参照。
6）Q1 § 135の注 6 〔大月版，537頁〕，参照。
7）グラムシが示唆しているのは，ファシズム労働運動の若干部分が，むなしくも
その法的承認のために争ったファシズム労働組合の工場代替者のことである。
この問題はすでに，ファシズム労働組合の指導者たちは，工業労働者の代表権
と協約権の独占を獲得するため，工業家連盟に対し工場内部委員会の廃止を認
める，同時に代表者の職務の問題を明確にすることを断念したヴィドーニ館協定
（1925年10月）のすぐを見つけに起きていた。その後，労働憲章（1927年）の編纂
の前日になって，ロッソーニは，むなしくも工場の労働組合代表信任委員の公
認を提案した。以来さらに数年間，この問題についての論争が，ファシスト出
版物の上で続いた。以上に関しては，アルベルト・アクローネ『全体主義国
家の組織』＝イナウディ社，トリノ，1965年，122頁以下，参照。

8）Q1 § 61の注 9 〔大月版，509頁〕，参照。この注は，前出，Q1 § 135の注 7。

§ 7 ミーノ＝マッカーリとアメリカニズム

C稿。A稿は，Q1 § 141『アメリカニズム』〔大月版，245頁〕，参照。
1）Q1 § 141の注 1 〔大月版，538頁〕，参照。

§ 8 質と量

C稿。A稿は，Q1 § 143『質と量』〔大月版，247頁〕。
1）同じこのノート〔Q22〕の § 16に記載。

§ 9 A・デ・ビエトリ・トネリが……

C稿。A稿は，Q1 § 146 〔大月版，248-249頁〕。
1）Q1 § 146の注 1 〔大月版，539頁〕，参照。